

やすらぎ通信

みどりの葬祭 Vol.50

Monthly Funeral Information oct/2020

令和2年
10
月号

0120-31-2774 やすらぎホールみさと 仏事相談**随時**承り中
お電話頂ければ専門スタッフがご自宅へ出向いてのご相談も承ります

みどりの葬祭 葬儀の現場から

お別れの言葉



葬儀の前日、打合せの時に故人様への『お別れの言葉』を誰が言うか、それとも無しにしようかと喪主様とお話しをしていました。その時ちょうど部屋へ入ってきた故人のお孫さんに喪主様が「あんだ～おばあちゃんにお別れの言葉、言ってくろっちゃ～」と声をかけたところ、お孫さまは「え～!…いやいやいや～…みんなの前で恥ずかしいし～…なに言ったらいいかわかんないし～…かわいい子どもが言うならまだわかるけど～」と、あまり乗り気ではないご様子でした。

担当者として、故人様へのお手紙でいいよ、思い出に残ってることや日常の事等を箇条書きにして書いてみると文章になるし、無理な場合はお別れの言葉は無くても式は進みますから、ご心配はいらないとお伝えしました。

そしてご葬儀当日、お孫さんが読まれたお別れのお手紙は、故人様を昔からよく知ってるご遺族ご親族、会葬に来られたご近所の皆様、故人様をあまりよく知らないお付き合いの関係でこられた会葬の皆様、更には司会者(担当者)の私までもが、その時の故人とお孫さまの情景が目に見え、すこし笑ってしまうような内容の、笑顔と感謝そして思い出やたくさんのエピソードのつまった、とても素晴らしい『お別れの言葉』でした。

ご葬儀に参列した皆様が、祭壇の中央の笑顔の遺影を涙して見つめていました。

後日、お話を聞くと前日の夜に写真を見ながら手紙を書いていた、思い出がいっぱい過ぎて筆が止まらなくなりこれでも半分にしたんですと話していました。

お別れの言葉にはいくつかルールのようなものがあります。

- ・はじめの言葉「突然の訃報に、深い驚きと悲しみでいっぱいです。」など
 - ・故人と自分の関係、思い出話「〇〇さんとはなんでも相談し合える信頼できる友人でした。」
※心に残るエピソードなど、個人の人物などを入れるとよいです。
 - ・遺族へのお悔やみの言葉「ご遺族のかたは、さぞお嘆きのことでしょう。心からお悔やみ申し上げます。」
 - ・結びの言葉「やすらかに眠ってください。さようなら。」など
- また使ってはいけないNGワードなどもあります。
「重ね重ね」「かえすがえす」などの同じ言葉を重ねたものや、「再び」「続いて」などの連鎖をイメージさせる言葉を「忌み言葉」といい、葬儀の場では好まれません。
また宗教の違いで使用できない言葉もありますが、あまりとらわれすぎずに、大切なのはご遺族や参列者が不快に感じる表現を避けることを心がければ、心のこもったお別れの言葉を捧げることができるのではないのでしょうか。

生活の中の仏教語

『遊(ゆう)』

柴田郡村田町 願勝寺住職
ほっと通信編集委員 信楽 秀

『仏教語大辞典』(中村 元著 東京書籍)を開くと、「遊」の項には、「①存在する・いる ②・・・している ③へめぐること ④時、くつろいでとどまること」と出てくる。

「遊」と訳されたサンスクリットは、VI-HARATI(ヴィハラティ)であり、「存在している」のような意味で、その名詞形がVI-HĀRA(ヴィハーラ)で、「行・遊・住・房舎・僧房・精舎」等などの漢訳をもつ、と教えられる。

漢字における「遊」は、「旂(ゆう)は氏族霊を奉じて外に旅する意で」あり、「旌旗(せいぎ)の流(吹き流し)なり」とある、と。「旗は神霊の宿るところであり、遊・遊はもと神の出遊をいう字であったが、神を奉じてゆくことをいい、神のように自由に行動することをもち」とある。(『字通』 白川静 平凡社)

サンスクリットを含めた仏教語も、漢字の意味合いからしても、どうも私たちの日常意識の「遊び」とは、違った意味の語であるようだ。

この違い目から何を尋ね、考え、明らかにしていくことが出来ようか。

詳言(しょうげん)する暇は無いが、「今・現に・在る」ことを問うことが、寛(くつろ)いで留まることとなり、そのような時間・空間を可能ならしめる場を房舎・僧房、つまり「寺」と言うのではないだろうか。そしてそれを実現するには、日常生活から撤退しなければならない。外への出遊である。

少し具体的なことを挙げるならば、大量生産・大量消費社会を作り出してきた経済社会を退去する、ということである。間違いなく大量生産・大量消費の経済社会は、私たちに収入の増加をもたらし、同時に、自由な時間(時間的拘束からの解放)=余暇を拡大させた。しかし問題は、その収入と時間の使い方である。私たちの日常意識の「遊び」は、その全体が経済社会からの拘束の中にある。そこからの脱却である。これを可能ならしめる道を訪(たず)ねること、これが仏教で言うところの「遊」なのではなかろうか。

このような意味を持つ「遊」は、「遊(ゆ)戯(げ)(遊化)」に展開し、経済社会を撤退する意味は、「檀那(布施)波羅蜜」を成らしめるであろう。そして何より、経済社会という家からの「出家」を成就させるものと、私は密かに考えている。